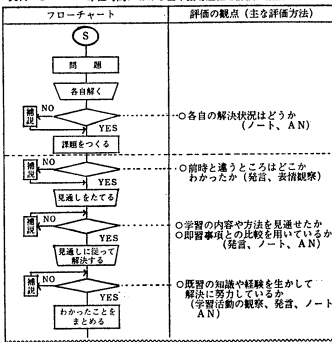


資料 3 一単位時間における基本指導過程と評価の観点



② 単位時間の指導例 (資料 4)

① 単位時間における指導過程と評価の観点 (資料 3)

(三) 指導の実例

・よくわかったことは何か

・よくわからなかったことは何か

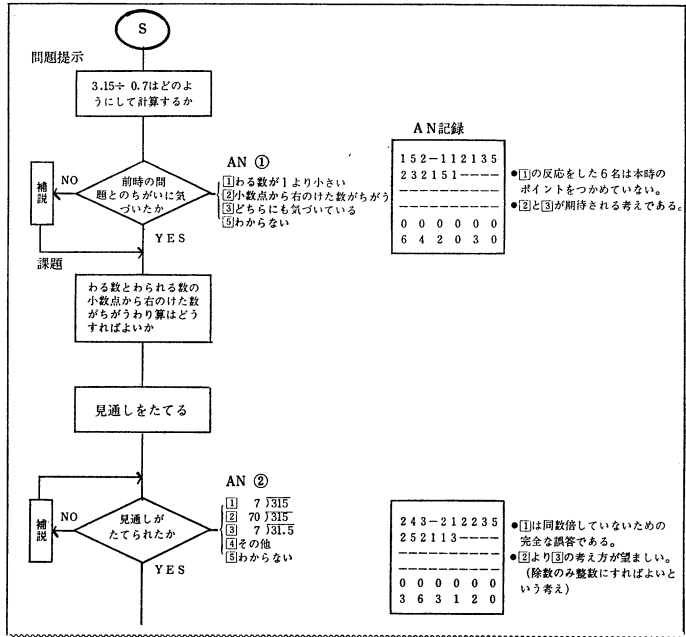
・感想 (ここがおもしろい、ふしぎだ、難しい、その他要望など)

自己評価は、学習活動、自己評価、学習活動というフィードバックのサイクルに位置づけられる。児童は、次の三点について学習過程において評価する。

価値、形成的評価など同系列に位置づけるものではないかも知れない。しかし、自分で学習した結果、わかったことは何か、わからなかったことは何かの明確化こそが重要なものであり、自ら学ぶ学習への転換を図る目的で行ってきたものである。

資料 4 実践例

1. 単元名 小数のわり算-小数でわる筆算のしかた
2. 本時の目標 整数÷小数や小数÷小数を筆算するには、除数が整数になるように被除数も同数倍しなければならないことがわかり、筆算の形で計算できる。



3. 考察

見直しを立てる段階では、わずか3名が除数のみ整数にすればよいと考えていたにすぎなかったが、各自の見直しに従って解決した結果、圧倒的に③の考えに変わってきた。除数のみ整数にするよさがわかってきたためだと思われる。

④ まとめ

(一) 実践の結果から

① 実践により、当初みられた特異な学力構成がやや解消されてきた。個人別には、偏差値が前年度より低下した児童は一名で、それ以外は一十三の伸び率を示した。

② アナライザーを活用した形成的評価活動は、つまずきの早期発見のため

の確かなフィードバック情報を得るものとして、大変有効なものであった。アナライザーに対する児童の感想を列挙すると、

・手を挙げなくとも自分の考えが伝えられる。

・自分で答えたこと (誤答も含めて) が、だれにもわからない。

・意見を言いやすい。

・自分が違うボタンを押すと、すぐ間

違いだとかかる。

などのよさを認めている。

しかし、

・ボタンを押すのがめんどうだ。

という感想もあることから、学習者の疲労を考えた適度な利用、効果的な使用方法について、再考して見る必要がある。

③ 自己評価を毎時間継続して書かせてきた結果、児童は絶えず「わかったことは何か」「わからなかったことは何か」を意識して授業に臨むようになってきた。

(二) 今後の課題

アナライザーを活用した形成的評価の実践は、つまずきの早期発見・補充・指導法の改善、検討の点で有益なものであった。しかし、つまずきに対しては即座に発見できても、それにどう対処していくかが問題である。わからない児童にはわかるように指導していけばよいわけだが、わからないことには様々な要因があり、実際の指導には困難を感じることも多かった。マイナス反応に対してどのように治療を加えていけばよいのか。単につまずきの発見にとどまることなく補充・深化指導のあり方に力を入れていきたいと考えている。

終わりに、「評価とは、児童にとっ て伸びようとする意欲を育てるための はげましの手段であり、教師にとって は授業の診断と改善を図っていく根拠 でなければならない」と考える。